

現地校との国際交流の在り方について

—— レバンタム小学校との交流実践を通して ——

前日本国総領事館付属商工会議所立ホーチミン日本人学校 教諭
北海道札幌市立伏古北小学校 教諭 村上 和彦

キーワード：国際交流、現地理解教育、異文化理解、国際コーディネイター

1. はじめに（研究のねらい）

海外にある日本人学校は現地校やインターナショナルスクールとの国際交流がカリキュラムの特色の1つとなっている。本校も同様に現地校（レバンタム小学校）との交流を特色の1つとして教育活動を進めている。レバンタム小学校との交流を通して、国際理解教育のより良い在り方を調査、研究しようと考えた。

また、海外で生活している児童生徒にとって、その国の歴史や文化を理解することは必要不可欠である。ベトナムで生活している児童生徒に授業を通して、ベトナムの歴史や文化を伝えるにはどのような内容にすれば有意義なものになるかを実践する必要があると考えた。

2. 日本文化の特色を生かした授業づくり

(1) 小学部4年生での交流～派遣1年目～

派遣1年目は小学部4年生の担任として、レバンタム小学校との交流を迎えた。この年は日本人学校がホストを務める年だったので、どのような交流内容にすればよいかを子どもたちと相談した。その結果、普段から授業で取り組んでいるもので日本らしいものを伝えよう、ということになり、日本の伝統文化である書道を生かした交流を目指すことになった。

当日、レバンタム小学校4年生を体育館に迎え、子どもたちは2人ペアを組んで、一緒に書道に取り組んだ。まず、日本人学校の児童がお手本を見せ、その後でレバンタム小の子どもが挑戦するという順番で進めた。書道を通して、どのペアも仲良く交流を進めることができた。また、書いた作品をレバンタム小の子どもにプレゼントすることで、相手に喜んでもらうなどの成果が見られた。



2人ペアでの交流

その一方で、交流を通してベトナムを身近な存在に感じるところまでは到達できなかったと感じた。それは今回の交流が単発のものであったことが大きな理由の1つである。事前に食べ物や交通など、身近な事柄を入口にベトナム理解を図る必要があると感じた。また、年齢は同じでも言葉の壁があるため、交流がうまく進まないペアがあった。お互いに日本語とベトナム語しか話すことができないため、交流はほぼ身振り手振りを交えてのものとなった。通訳ができる人の存在が必要不可欠だと感じるなどの課題が残った。

(2) 小学部1年生での交流～派遣3年目～

派遣3年目は小学部1年生の担任としてレバンタム小との交流を迎えた。昨年度まで小1～6を対象に行っていた交流活動であるが、児童数増加のため、今年度から小1～3を対象に実施することになった。また、今年度より交流テーマを設けることとなり、「日本とベトナムを結ぶ龍」と設定した。各クラスでの交流活動の中でちぎり絵を実施し、各パートに分けられた龍を合わせると一体の巨大な龍ができあがるというものである。ちぎり絵は手先の器用な日本人の特性を生かした文化の1つであり、龍はベトナムのシンボルである。龍を完成させるという目的を共有することで、この交流を成功させたいというねらいである。筆者としては派遣1年目での成

果と課題を踏まえ、単発の交流ではなく、事前にはっきりと授業計画を立てて、臨むことにした。

《2018年度レバンタム小学校交流計画》

- ・第1時 ベトナムを知ろう～フォトランゲージを通して～
- ・第2時 ベトナム語の挨拶を知ろう
- ・第3時 ベトナムの歌を歌おう&名刺づくりをしよう
- ・第4時 レバンタム小学校の子どもとちぎり絵をしよう
- ・第5時 交流をふり返ろう

○第1時 ベトナムを知ろう～フォトランゲージを通して～

「衣・食・交通」をテーマにベトナムと日本の写真を子どもたちに提示し、それぞれの国に分ける学習を行った。これは小学1年生という発達段階を考えると視覚からの情報が効果的だと考えたからである。友達と相談し、楽しみながらベトナムの特色を学ぶことがねらいである。まず、ベトナムの伝統衣装である「アオザイ」やベトナム料理の代表格「フォー」「バインミー」といった写真から、日本の寿司や富士山などの写真を混ぜて、子どもたちに提示した。子どもたちは日ごろ見知った知識を活用して、相談しながらそれぞれの国に分けていた。驚いたのは子どもたちがベトナムの特徴を思いのほか知っていたことである。「ドラゴンフルーツ」、「モンキーバナナ」といったベトナムならではのフルーツや市内を走るバスや名物の「シクロ」といった交通も難なく分けていた。面白かったのはマクドナルドである。日本でも当たり前に見かけるマクドナルド。ベトナムか日本かで子どもたちが着目したのが、看板に書かれた文字である。その看板はベトナム語で書かれており、ベトナムに仕分けすることができた。そして第2時であるベトナム語の挨拶につなげる流れとした。

○第2時 ベトナム語の挨拶を知ろう

現地校の子どもと交流する上で挨拶はお互いに心を開く第一歩となる。日本人学校の子どもがベトナム語の挨拶ができれば、交流がスムーズに進むと考えた。小学部1年生という発達段階を考えると、簡単な内容の言葉が望ましい。そこで、以下のように最初の出会いに使えるような言葉を選んで学習することにした。

- | | |
|--------------------------|-----------------------------------|
| ・ Xin Chao 「こんにちは」 | ・ Cam on 「ありがとう」 |
| ・ Tam biet 「さようなら」 | ・ Khong co chi 「どういたしまして」 |
| ・ Hen gap lai 「また会いましょう」 | ・ Cac ban cung choi nhe! 「一緒に遊ぼう」 |

ここで活躍したのが国際家庭の子どもたちである。本校では父親が日本人で母親がベトナム人という家庭が多く、筆者のクラスでも5名の子どもたちが国際家庭で育っている。彼らは日本人学校では日本語を使っているが、一歩外に出るとベトナム語を中心にコミュニケーションを取っており、ベトナム語が堪能である。この時間は彼らに発音の仕方のお手本を見せてもらいながら、意味を確認した。そして、実際にレバンタム小の子どもが来たことを想定して挨拶をするシミュレーションを行った。子どもたちは“Xin Chao”や“Cam on”などはタクシー乗車の際など日常生活でも使っており、楽しく学ぶことができた。

この学習後は朝の会や帰りの会の挨拶もベトナム語で行うようにしたり、「ベトナム語コーナー」を設けて、子どもたちが自主的に調べてきた表現も紹介したりして、クラス全体でベトナム語に親しめるような雰囲気づくりを心掛けた。

○第3時 ベトナム語の歌を歌おう&名刺づくりをしよう

小学部1年生にとって、歌はとても身近な存在である。そこで、ベトナム語の歌を歌うことで、よりベトナムに親しめると考えた。歌ったのはBac kim than, Ca Nha Thuong Nhapというベトナムの子どもであれば、誰もが口ずさめるようなわらべ歌2曲である。音楽専科の先生とも協力して、朝の会と音楽の時間に練習することにした。ここで、子どもたちにとって難しかったのは、歌詞を覚えることである。日本語の歌であれば、意味と一緒に歌

詞を覚えることができるが、何しろ歌詞はベトナム語である。時間をかけ、繰り返し練習することで、何とか歌えるようになった。

次に名刺づくりに取り組んだ。これは両校ともに交流の際、お互いに交換できるように事前に申し合わせをしておいたものである。名前と大切にしている宝物を英語で書いて、好きな色を塗って作った手作りの名刺。本校の子どもたちは週3時間英会話の授業を受けており、日頃から英語に親しんでいる。また、レバンタム小学校も週2時間英語の授業があり、お互いに英語は理解できる環境にあると考えた。さらにお互いの国旗を入れて、より交流色の強いものとした。1年生にとっては初めての国際交流となる。中には交流する実感のない子も多く見られたが、名刺づくりをすることで少しずつ実感が湧いてきたようである。名刺づくりは子どもたちに交流が近づいてきたことを気付かせるには効果的であった。

○第4時 レバンタム小学校の子どもとちぎり絵をしよう

いよいよ、レバンタム小学校の児童との交流である。小1なので、すぐに仲良くなれるのではないかと楽観的に考えていたが、対面当初はやはり子どもたちの中に戸惑いが見られた。小1の児童にとって、ベトナムの子どもたちは外国人である。日系の幼稚園に通っていた子どもたちは国際交流の経験がなく、不安そうであった。そこで、まず筆者自身が積極的に行動することを心がけた。レバンタム小の先生や子どもたちに声をかけて回った。子どもは教師の動きを見て安心し、自発的に行動するものである。そうすると、筆者の動きを見ていた子どもたちの何人かがレバンタム小の子どもたちに声をかけ始めた。そこで効果を発揮したのが、ベトナム語の挨拶である。Xin Chao「こんにちは」、Cac ban cung choi nhe!「一緒に遊ぼう」と学習したベトナム語で話しかけることで、少しずつ距離を縮めることができた。また、名刺交換の際にはお互いに笑顔がこぼれ、親近感が湧いたようである。名刺に書かれた宝物のところにFamilyとあるのを見つけては、「同じだ!」と共通点を見つけていたようだ。

内容に関しては「ちぎり絵をして龍を作る」、という共通の目的がある方が充実した交流ができると感じた。本校の児童が実際にちぎり絵のやり方のお手本を見せ、レバンタム小の子どもがそれに倣うという姿が見られた。完成した後は「できた!」という声があがった。ゲーム等で楽しんで終わる交流も良いが、そうではなく、形として残るもののほうが、完成したときの達成感を共有できると感じた。対面当初はお互いに手探りだった子どもたちも、終わるころには一緒に写真に納まるまで仲良くなっていた。

また、ここで見逃せないのが国際コーディネイターの活躍である。本校は国際(日越)家庭の保護者の方にクラスから1名、国際コーディネイターの役割をお願いしている。派遣1年目の際は、レバンタム小学校の先生に交流内容や移動の指示を伝える際、どうしても言葉の壁があり、うまく伝えることができなかった。その反省点から今年には国際コーディネイターの方に通訳をお願いしたが、そのおかげで、レバンタム小学校の先生との円滑なコミュニケーションを図ることができた。

次に体育館に移動して、全体交流を行った。代表児童の挨拶の後、第3時で練習したベトナムのわらべ歌を小1～3までの児童全員で歌った。文化的背景や年齢の異なる子どもたちが交流するうえで、「歌」というのは唯一共通する文化と言えるかもしれない。お互いに元気よく歌って、交流は幕を閉じた。

○第5時 交流をふり返ろう

レバンタム小学校の子どもたちとの交流を絵と文でふり返りを行った。概ね、「ちぎり絵が楽しかった」「ベトナム語が通じたとき、嬉しかった」「全員でベトナムの歌を歌えてよかった」といった好意的な内容が記述さ



完成した龍

れていた。その一方で、「言葉が通じなくて、どうしたらよいかわからなかった」「時間が短くて、仲良くなる前に終わってしまった」という声も上がった。やはり子どもたちにとって、言葉の壁は相手との交流をためらう1つの要因になっているようだ。また、時間については相手校の都合もあるため、やむを得ない部分もある。決められた時間内で、どのような内容にすれば効果的かをもう一度見直す必要があると感じた。

いずれにせよ、初めての国際交流を無事終えて、子どもたちは安堵の表情を浮かべていた。後日、完成した龍のお披露目会が開かれたときに、感嘆の声が上がったのは言うまでもない。

3. 成果と課題

2度にわたるレバンタム小学校との交流について、成果と課題をまとめると以下のようになる。

《成果》

子どもたちが交流を通して、国際交流の楽しさを体験することができた。

授業計画を立てることで、本時（交流）に向けて、内容に継続性を持たせることができた。

「ちぎり絵」という交流手段が効果的であった。

交流を通して、子どもたちがよりベトナムに目を向けるようになった。

《課題》

レバンタム小との文化的な背景に起因する意思疎通の難しさを感じた。

引継ぎ機会の確保と継続性が求められる。

4. 終わりに

ホーチミン日本人学校に勤務した3年間は国際交流の在り方について、常に試行錯誤を繰り返す時間であった。ベトナムの子どもたちに日本の良さを伝えるために、日本文化を生かした交流方法とは何だろうと思案に耽ったり、同僚の先生と意見を戦わせたりした。そのような環境に身を置けたことに感謝したい。そして、日本に帰国したのちも、子どもたちにベトナム文化の素晴らしさを伝える授業を実践していきたいと考えている。